

浄影寺慧遠の浄土観に関する一考察

坂 本 啓 明

中国において、念仏・観仏は多様な展開を持つが、『観無量寿経』は善導を始めとする諸師に重視され、現存する中で最古の『観無量寿経』の註釈は浄影寺慧遠（以下慧遠）の『観無量寿経義疏』（以下『観経疏』）である。

まず慧遠とは中国南北朝時代から隋代にかけて活動した地論宗南道派の僧侶である。唯識思想の研究の他、辞書的な仏教総論書『大乘義章』の執筆や浄土系経典『無量寿経』・『観無量寿経』の中国で初めての註釈なども行っている。

発表の論点は『観無量寿経』の観仏の性質を慧遠がどう解釈するかについてであり、研究方法としては『大乘義章』・『維摩義記』の法身説と『観経疏』第八観の随文解釈とを比較すること、深貝氏の先行研究における前述の二点の検討を通じて、『観経疏』における観仏三昧について考察を行う。

論題を「浄影寺慧遠の浄土観に関する一考察」とした理由は、慧遠における法身の意義と法身を対境とした観仏について論じたいが、『観無量寿経』の「法界身」は法身が法界に遍在しているということを示しており、また後に論じるように慧遠は法性土と仏の法身が同体であると認めているため、法身＝仏の真土としての立場から、タイトルを「浄影寺慧遠の浄土観に関する一考察」とした。

発表においては、『観無量寿経』第八観の経文における「法界身」「是心是仏」の記述に対する『観経疏』の解釈と、比較対象として慧遠が自身の教学についての辞書的に解説する『大乘義章』から「三仏義」や「浄土義」といった関

連箇所、慧遠による『維摩經』の解釈である『維摩義記』から維摩が釈迦の法身を觀じる「見阿闍品」の随文解釈の二つを取り上げた。また、『觀經疏』の「法界身」の記述に関する先行研究である深貝慈孝氏の説を参照した。深貝氏は、慧遠は第八觀において、「諸仏の法身の体」の「体」を身体として、凡夫が法身を見ると解釈していると指摘する。また深貝氏は凡夫が法身を見ることの証果として諸仏の法身と凡夫が同体となると解釈している。

第一に『大乘義章』『淨土義』慧遠の真土・法性土についての解釈から、慧遠の淨土觀を考察する。慧遠は、仏国土は本来唯一仏土であるが、仏の所託である真土と他に隨つて現す応土に分けられるとしている。続いて一仏土と真應二土との関連について「淨土義」の中の「同体淨」の解説において述べている。慧遠は「同体淨」において、同体の意義を三つ挙げる。一つは法性土・實報土・円應土の三土に分けた場合、實報土・円應土は法性土がその根本であること。二つは真土・応土の二土に分けた場合、応土は真土をその体とすること。三つは応土の中において衆生が同じ土地において別の相を見ることがあるということである。

以上の三点から、慧遠の淨土觀の基本をまとめると、真應二土があつてもその体としては法性土の一仏土であり、諸仏国土は唯一仏に包摂されると慧遠は理解していることがわかる。

第二に慧遠の仏身説について、『大乘義章』『三仏義』の解釈から、法身に関連する箇所を考察する。慧遠は法身とは「体」に基づく名称とする。法身の法とは法性であり、衆生の体であるとしている。妄想を息めて、如来藏を顯すと法身を成じるといふ。法身の体に覺照（仏智）が存在することを法身仏とするのである。

続いて慧遠は仏を真應の二身で分別する場合、仏の自行の功德による身を真身とし、世間に應じる身を応身と述べている。真身とは法門身であり、世間の法や衆生の体・識を摂しており、（真）心は有であるが、相は無い。応身とは世間に應じる身であつて、世間と同じく色像が存在するとしている。平等法門の身は何処かに存在することはないので、法界に遍満しているとしている。法身は一切の色を内包しており、無相であるが、有色であるとするのである。即ち慧遠の法身觀としては以下の二点があると考ええる。(1)真心・本覺として衆生と仏は同体であり、衆生は

妄想によって覆われ、法身が顕れていないだけであるとされる。(2)法性土は、法身＝法性である一切の色を内包し、法界と仏は同体であるとされている。

第三に慧遠の法身観仏について、『観経疏』『釈名』と『維摩義記』『見阿閼品』の解釈を用いて考察する。『観経疏』『釈名』における、『観無量寿経』の経題の「観」字の解釈において、仏を対境とした観仏全般について、対境となる仏の違いから、応身観と真身観に分けている。真身観が法身を対境とした観仏である。

仏の真身を観じるということは、相が絶せられ、彼と此の差別の相が無いので、(仏身の)諸根・相好は法界に遍満しているとしていることを観じる。諸根・相好及び仏刹土・一切衆生を一眼中に悉く観じることが出来るという。法身観仏においては、無相の法界身を観じることは、つまり法界そのものを観じることでもあるとしている。

第四に『観経疏』第八観の解釈において、『観無量寿経』第八観の「法界身」「是心是仏」の語句に対してどのように解釈しているかについて考察した。

第八観ではまず「釈名」における、経題の「無量寿」の解釈と同様に所観の仏は応身であるとする。

「諸仏如来是れ法界身なり。」「心是れ仏」とあることに対し、仏の法身は本来的に衆生と同体であるので、一切衆生の心にも入ることが出来る。よって、心に仏を観想する時、行者の心は諸仏の相好そのものであるとする。「是心作仏」「是心是仏」についてはさらに二通りの解釈を行っている。一つには観仏の始終の違いであって、観仏を修することを始である「是心作仏」と、観仏が成就することを終である「是心是仏」とする。二つには今、観仏を修することで、行者と同体である仏の法身が変化することによって、仏が心中に現じる。ここで現じた諸仏の相好がそのまま諸仏の色身であること、つまり法身仏の「体」は行者の(真)心であることを「是心是仏」としている。そして将来的に観仏の功德によって成仏することを「是心作仏」としている。

以上の第八観の解釈をまとめると仏の法身の立場では仏と衆生は同体であるため、観仏を行じて、心中に現れる相好は仏そのものであるとした上で、相好を観じる以上、色身であって無相の法身ではないため、所観の仏は応身とな

り、『観無量寿経』の観仏は応身観であると慧遠は主張しているのではないだろうか。

今回判明したことは、慧遠の仏身観においては仏の法身と衆生は同じく法性を「体」として、真心・本覚として同体であることである。また、慧遠の仏土観においては、諸々の仏国土は真土として一仏土に包括されること、そして一仏土もまた、仏の三身に対応するが、法身と法性土の関係として、法身と法性土は同体であるということである。慧遠の法身観仏は、法身とは法性を体とすること、法界身として一切法を包摂することの二点から、法身観仏とは無相の法性・法界身を観じるので、諸仏の相好を観じる『観無量寿経』の第八観を慧遠は応身観であると規定していたのではないかと考える。